



TITLE:

懇親会

AUTHOR(S):

CITATION:

懇親会. 物性研究 2008, 90(2-3): 405-422

ISSUE DATE:

2008-05-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/142635>

RIGHT:

懇親会

坂東 :すみませーん。今日はマイクを用意していませんけれども、みんなも、あの佐藤さんの声はたまらないですね。そんなことで、みんな大きな声で言わんと損やということで、私も声が大きいですが。今日は、もういま、言い残したことというのは、佐藤さんなんかは半分も話していない。

佐藤 :あれはほかでしゃべったのを持ってきただけだから。

坂東 :ほんま、そうですか。

佐々木 :だからタダなんだ。

坂東 :それならタダや。あれはリサイクル。リユースってことですね。

そんなので、今日はどうもみなさん、ありがとうございます。たいへん面白い話をいろいろと聴かせていただいて。若い人も勉強になったと言ってくださっていることもありますし、去年来た人も、今日は来ていただいていますので、初めにちょっと、中西先生に、挨拶をしてもらって、すぐに食事になるようにしたいと思います。

中西 :挨拶じゃなくって、ただの雑談ということで。だから先に乾杯をやってくださいよ。

坂東 :乾杯を先にやりますか？

それなら南部先生に乾杯の音頭を取っていただきましょうか。それではみなさん。あんまりしゃべらないように、静かに！ 私も授業中に学生を静かにさせるの、大変なんですから。ここは大丈夫だと思いますけど。それでは南部先生どうぞ。

南部 :それじゃあ何語で言うか。ドイツ語か。「Prost」

参加者 : Prost.

坂東 :先生、いま何ておっしゃったんですか？

南部 :「Prost」.

中西 :ドイツ語で「乾杯」.

坂東 :ドイツ語だそうです。

佐々木 :坂東さんも、もうドイツ語はだめなの？

早川 :そんな。いかにもできるようなことを言って。

佐々木 :いや、その言葉だけは知っている。

南部 :もともとはラテン語です。

坂東 :みなさん、もう時間が遅いので、まずは食べましょう。

そちらだけではなくて、こっちのほうにディッシュがいろいろとありますので、こちらのほうにも移動して、まずはお腹を満たしてください。

坂東 :それでは、ちょっとはお腹がいっぱいになったと思いますので、まずは中西先生に、ご挨拶をお願いしておりますので、お静かに。よろしくお願いします。

中西 :たくさん話を聴かれて、食傷しているかなと思うので、なるべく簡単に。いいですか、もう。雑談のつもりで、すみません。

ご挨拶じゃなくって、雑談ですけども、いいですか。ご挨拶はもう、さっき南部先生が「Prost」を言われたので、それで済んだことにいたしまして。雑談。

何でもいいという話なので、適当に雑談しますが、昨日は橋本さんが superstring のレビューをやられて、そのときに出てきたと思いますが、本の表紙、三つ本があって、真ん中の Peter Woit のですね。Pauli の言葉の「Not Even Wrong」という言葉を表題に、本を書いています。やはり superstring の反対論者を結集したのですが、最近『スター・

ウォーズ』をもじって「ストリング・ウォーズ」と言われているらしいです。その話とちよつと関連した話をさせていただきます。

僕は2年ほど前に、「究極理論における時空とはどんなものだろうか」という論文を、『素粒子論研究』に書いたのですけれども、その英訳版を最近、high energy physics のアーカイブに投稿したのです。そうしたら、ちよつと反響がありまして、いくつかコメントをいただきました。そのとき、criticism welcome と書いたものですから、来たのですけれども、criticism じゃなくて、ほとんど自分の論文の自己宣伝のほうなので、コメントになっていないのですけれども、そのうちの1人にですね、Schroer という人がいます。Schroer さんというのは、1970年代に、infra particle という話をやった人です。infra particle というのは、massive particle が massless particle と相互作用していると、discrete spectrum がなくなるという、electron なんかそうなのですね、そういう話をやった人なのです。

その彼が最近、anti-superstring を、えらく頑張つてやっているのです。彼はもともとは Haag たちの、いわゆる代数的場の量子論ですか、algebraic quantum field theory というのに心酔していまして、そういう非常に立派な理論がある。その非常に立派な理論が、日本ではご存じの、数理研の小嶋くんのグループがやっていますけれども、他はあんまりどこもやっていないのです。アメリカでは特に、全然やっていないのです。

そんな非常に立派な理論なのに、全然流行らないのはどういうわけかと。それはsuperstring が流行っているから、そのために被害を被っているんだという大論陣を張りました。Anti-superstring の人が結集するために、僕も批判めいたことを書いていましたら、superstring 自身ではないのですけれども、extra dimension とか、quantized spacetime とか、そういう話の批判をちよつと書いたものですから、論文を出さないかという話になりました。

そういう話に乗りまして、昔、私が1985年に「Superstring syndrome」というjoke paper を書いたことがあるのですが、当時はよく知られた話だったのですけれども、若い方は多分ご存じないと思います、20年になりますから。その当時は、世界中をコピーがかけ巡って、知られました。

その話と、それで有名になったものですから、すぐに雑誌の『パリティ』というところが、その雑誌にも書いてくれというので、「超弦理論症候群」という雑談を書きまして、その英訳。

それから、superstring は、1990年ぐらいに一時流行がちよつと収まるのです。再度流行するのがDブレーンが1995年に出てからで、そこで盛り上がるのですけれども、1990年から95年のあいだはわりと下火でした。そのときに、日本物理学会から、superstring にケチを付ける話を頼まれまして、それを書いたのです。「超弦理論は物理になるか」という表題で。それが1993年。

その三つ。初めの一つはすでに青山君が英訳しておりましたので、あとの二つを急遽英訳して、Schroer さんに送ったのです。それがさっきの Peter Woit のウェブログに載せたわけです³。もし興味のある方がいらっしゃれば、そのウェブログを見ていただいたらいいと思います。そこに三つの記事と、他の人のコメントもついています。

コメントもたくさん出たのですけれども、コメントといっても変なものがありまして、物理にあんまり関係のないコメント、例えば、そのときsuperstring が、バブルがはじけたという「burst」という言葉を使ったのですけれども、「burst」の過去形は「bursted」だと思っていたら、「burst」は過去形も「burst」だと。つまり不規則動詞なのです。そういうコメン

³<http://www.math.columbia.edu/~woit/wordpress/?m=200610> “Some Early Criticism of String Theory” (October 30th, 2006)

トもあるぐらいで、あまり物理と関係がないコメントもたくさんありますけれども、それでもよかったら、見てください。そういう雑談です。

坂東：ありがとうございます。

なんかやっぱり、年配になると、みんな自分の本を宣伝していますね。みんなそんな感じで、佐藤さんは一体何冊言われたのかなと思ったりしているのですけれども、あれっ、佐藤さんはどこ行った。

これからこれは、なかなか難しいのですけれども、みんなインフォーマルに、いろいろな人に感想とか、これからのこととかを話していただいたらいいかなと思っているのですけれども、若い人が少ないので、あなたどう。初めはやっぱりかわいそうかな。

日置：坂東さん、あのね、いま、中西先生がおっしゃった「Superstring syndrome」ですか、ちょっと一言コメントさせてほしいのですけれども。

私は1986年から87年に、マックスプランクにおりまして、同じ部屋にいた、名前は覚えていないのですけれども、イタリア人だったかな、机に向かって「がははは」と笑い出したのです。おい、どうしたんだって言ったら、中西先生の「Superstring syndrome」の英訳版が出回っていて、それを読んで笑い出していたということがありました。

ですからあれは、素研でしたかね、英訳版が世界中に広がっております。

伊沢：どういう笑いだろう。

坂東：笑うっていうのは、どういう。

佐々木：少なくとも面白いんです。

坂東：面白いだけではね。

日置：要するに、「赤緑色盲」というか、ちょっと差別用語が出てくるから、まずいかもしれないから。グリーン・シュワルツに引っかけられた洒落が入ってしまして。

松井：私はその頃、MITにいたんですけど、その英語版が掲示板に貼ってありました。訳したのは青山さんだということ。

ダン・フリードマンという人がいるんですけど、ご存じだと思いますけれども、ダン・フリードマンという、スーパーグラビティをやっていた人です。あの人がコメントを、お昼を食べているときに言って。

坂東：どういう評価だったんですか。

松井：中西さんは、悪いことを書くような人じゃないって。英訳が悪いんじゃないかということを書いていました。

坂東：ということだそうです。

佐々木：ちょっとそれでね、superstring と関係があるか知らないのですが、最近、なんとなく、自分自身もそれに毒されているかもしれないのですが、思うのは、今日の石原くんの話とか、橋本さんの話とか、基本的に高次元ですね、要するに4次元、現実の、われわれが持っている、あるいは現実の物理の、本当の意味での、何らかのイメージ、観測的な意味も含めてなのですから、時空というのは、次元は4次元より高いということを、どこまで信じているのでしょうか？若い人はほとんどそれは「はい」と手を挙げるんじゃないかと思うのですけれども、だいたいそれが、嘘だと思うか本当だと思うか、アンケートを取ると全体がわかるので、やってみたいんですが、どうでしょうか。

実際の時空の次元は4次元ではない、5次元以上であると思う方？

[約5名挙手：橋本、石原、川村、中野、坂東]

佐々木：やっぱり。

坂東：私も若いってことです。

佐々木：どうもありがとうございました。

坂東：なんや、それで終わり？

佐々木：それ以上難しいことを言うと。

坂東：川村さん。手を挙げた、どうぞ。

川村：私は若いほうですけども、僕は superstring をやっているし、super symmetry もやっているし、extra dimension もやっているし、だから中西さんから言わせれば、格好の何と云うか。

佐藤_x：やっていないのは物理だけだ。

川村：一応、教科書も書きましたので。宣伝すると、またまずいのかもしれないんですけども。

佐藤_x：それは物理じゃないんじゃない？

坂東：そういえば、また佐藤_xさんは話が長くなるかもしれないんですけど、佐藤_xさんはアインシュタイン年の、物理学会の講演で、string は 40 年やって、何も出てこなかったんやから、あんなものは嘘だって言われましたよね？

佐藤_x：言った？

坂東：ちょっとそれ。ごまかしたらダメですよ。

佐藤_x：最近、いろいろな、一つはアフリカで、さっき出てきた、バートン・リヒターが、とにかく string は何をやっているのか。こんな効率の悪いって。ご存じない方も。次々といろいろなメディアが取り上げています。

坂東：佐藤さんに聞いたのであって、リヒターがどう言ったかなんか、どうでもいいんです。

佐藤_x：いや、違う。世の中は権威主義ですからね。私が言ったって言ったんじゃ、だめなんです。

坂東：どうも佐藤さん、お歳取ったみたい。

佐藤_x：みんなが権威主義を自覚していないというのを、私が言いたいのです。私は違います。

坂東：実を言いますと、佐藤さんには、本当はまとめをお願いしていたんですけども、これは無理でしたね。無理ってということがよくわかりました。今日のお話を聞いて…。

実を言いますと、私と佐藤さんは同級生なんです。それで、昔から野心家でしたし、あれですけども、ますます口が悪くなりましたね。どうもありがとうございました。

それでは川崎先生。何か一言、いかがですか？去年も出ていただいています。

川崎：そうなんです。今年は体調があんまり良くないもんだから、申しわけないけど、やっぱり私の世代は臨界現象で育った世代なんです。そこで、去年も言ったと思うけど、やっぱり物理では自然認識に階層性があることが大切ですね。こういったら怒られるかも知れないけど、素粒子論だったら、これよりかもっと小さいものはない、それが基本だ、それがすべてだと、「theory of everything」という言葉を今日言われたように思います。私は臨界現象で育った人間ですが、最初はミクロなレベルからスタートする久保公式や、松原 Green 関数、そういうものがあって、それですべていけると思っていた。それは一番ファンダメンタルだからね。それからそれが惨めな失敗に終わったんですよ。実際の breakthrough は、まったく違ったところから来ました。

それはどういうことかということ、自然の認識にはそれぞれの階層があるということ。私は去年も言ったから、繰り返さないけど、そういうことで、アンダーソンが言った「More is different.」という有名な言葉があります。アンダーソンは、常に各階層には特有の違った physics があるということを、そこで主張したかったと思うんですよ。高温超伝導について、いろいろと云われていますけれども、僕はロスアラモスに行ったとき、パインズが、一般向けの講演をしました。そのとき「ハバード・モデルではだめだ。高温超伝導は関係ない」って言ったんです。もっと大事なものは、メゾスケールのいろいろなパターンの構造だと言いま

した。私は高温超伝導は詳しくありませんけれども、それで私は、非常に共感しました。

そういうことで、私は、これまで物理で学んだ、一番重要な教訓は自然認識における階層性だと思います。

坂東：はい、ありがとうございました。正直言いますと、川崎先生の去年の講演は、ちょっとわかりにくかったですから。

川崎：それでも話しの筋はつけたつもりです。

坂東：あとのレポートを読みますと、ものすごく感激して、面白いなと思いました。

川崎：勝手なことを書いて、申しわけありません。

坂東：最後のほうには、すごく面白いことが書いてあります。なんで日本人は独創的でないとか。

川崎：独創的で「ない」とは言っていないですよ。

坂東：独創的な仕事が出にくいのはなぜか。

川崎：なにか独特のものを出しにくい雰囲気はあると思います。研究に限らず、いまの教育の問題でも、校長が自殺したり、子どもが自殺したりする雰囲気と共通しているものがあると思うんですよ。

坂東：物理だけではなく、そういうお話もしていただきました。どうもありがとうございます。

それでは梶田さん、いかがですか。初めてこんな会に参加して、実験も好きなことを言っていると思いますけど、この会って、理論のなかでも、けっこう好きなことを言っているグループかなと。研究会かなと思うんですけど。

梶田：俺、べつに言うこともないです。

坂東：ない？ どうですか。昨日の話の中で一番面白い話をしていただいたので、志の高いとか低いとか、勝手に言いまして、どうも申しわけありませんでした。

川畑：適当な言葉がなかなか見つからなかったのですが、それを、私の言いたいことを坂東先生が「志」という言葉で言っていたので、まさにそのとおりかと思います。

だから、見つけたいことを見つければおしまいというのではなくて、梶田さんのにもありましたけれども、見つけたいこと以外に出てくる、そこが非常に大事で、どうもいまの人は、昨日も言ったけど、見つけたいことが出てきたら、そこでおしまい。それじゃあだめだなということですよ。

坂東：どうもありがとうございました。

田中_正：先生は長そうだから、こっちの田中_正先生に、一言。昨日から湯川先生の話巡って、いろいろと、今日は湯川先生がやり残したことの話になっていましたけど、いかがですか。

田中_正：今朝、家を出るときには、今日、こういうスピーチをするとは全然思わないで出てきました。実は昨晚、夕食を南部先生、坂東さん、九後さん、それから若い人...

坂東：はっちゃん(橋本幸士君の愛称)です。

田中_正：あそこのフランス料理店で、時計台下の。

坂東：フランス料理店なんて、時計台の下にある大学内のレストランで、そんなに高いところじゃないじゃないですよ。

田中_正：2時間以上話しまして、やっぱり非常に、何かやっぱり発言すべきだと思いまして、坂東さんと相談して、急遽、これが先ほど書いた走り書きなんですけど、用意してきました。ちょっと爆弾発言を、本来、「タナカショウ」というのは本来そういうものだったので、30年昔に戻って、今日は爆弾発言をさせていただきます。

それは、京都大学の批判であります。ここは全国共同利用研究所であり、そういう話をしててもよろしいかと、いま、一番大ボスである田中_正さんに、彼は京大の大ボスですよ、湯

川研の大先輩でもあるし、その彼の許可を得ましたので、許可がなかったってしゃべりますけれども。

坂東：田中先生のような方がこんな発言をされるとはすごい！ 南部先生の影響ですかね！

田中正：その前に、一言。実は、私は「湯川・朝永生誕 100 年...」というのは、あんまりぴんこないのです。どっちかという、「湯川没後 25 年」なのです。そちらのほうが、この 2、3 年間、頭にあったわけです。しかし少なくとも、いまの京都大学の行事としても、それから全国的にも、湯川・朝永の生誕 100 年ということでもあります。ここでの願いは、これを今年、来年のお祭りにはすべきでない、後はもう忘れるということはないように、してほしいというのが私の希望です。だから今後をどうするかと、最後はそこへ落ち着く話にしたいと思います。

例えばこの研究会にしても、多分、坂東さんは迷っておられると思うのです。去年、今年とやって、来年はどうするのかということがありますから。そのへんもお考えいただく、一つの資料になるのではないかと思います。一言話します。

冒頭に、まず忘れないうちに、私がいまここに立っている最小限の目的は、一つお礼を申しあげること。というのは、去年の 7 月の終わりでしたか、第 55 回パグウォッシュ・コンファレンスというのが、広島でおこなわれまして、そのときに思い立って、ほんの 1 週間ぐらい前だったのですが、高木修二さんという、阪大の原子核の、あの先生が、私の比較的近くで、聖護院に住んでおられまして、それから加藤利三さん、光物性の京大名誉教授、この三人で、このパグウォッシュ会議というのは、戦後、被爆 60 年かを記念して開かれるのだけれども、1975 年には湯川・朝永宣言とかがあったわけですから、本当に原点に立ち返って世界の科学者がパグウォッシュ会議に集まってほしいというメッセージを出したわけです。

坂東さんはこの会議にメンバーとして参加されました。高木修二さんは、病気でしたけれども、最期の力をふりしぼって頑張ってお下され、メッセージの原案作りも高木さんのお宅に行っていました。

結果的には不発でした。メッセージを送ったけれども、ほとんどそのレスポンスはありませんでした。

そのとき、たまたま九後さんにその話をもちかけたら、今日京都大学の部局会議があるから、直接総長のところで賛同署名をもらおうとおっしゃって、その日のうちに、尾池総長から第一号の署名をもらいました。それに勇気づけられて、坂東さんを通じて基研の若い人たちの全面的協力をいただいて、わずか 4、5 日のあいだに、252 名の賛同署名、ほとんどインターネットでしたが、もらったわけです。びっくりしました。

坂東：どうせ年寄りばかりだと思っておられたのでしょうか。

田中正：そうだったんだけど、意外でした。署名リストを見ましたら、けっこう 30 代、40 代の人が、非常に大勢署名をしてくださった。そのお礼を、まず述べよという話。

坂東：そんなこと言ってくださいとは言っていないですよ。

田中正：まずそれが一つ。

佐々木：まだ全然、京都大学批判になっていないですよ。

田中正：これから言うわけですよ。それで実は、その前後から、去年の夏ぐらいでしたかね、時計台のレストランがありますが、あのへんで加藤利三さん、坂東さん、九後さんとか 4、5 人でたむろして、よからぬことをいろいろ相談して、先ほど言ったように、とにかく湯川・朝永の伝統を受け継ぐと言っても、そんな生ちよろいもんじゃないんじゃない、どうやってこれは始めるかと。

科学者京都会議というのは、湯川さんの生存中、4、5回ありました。あのときは、湯川、朝永というバックボーンがあるわけです。だから文系の先生方も集まるわけですが、今のわれわれは、残念ながらそれはない、志はあるんだけど、誰もついて来てくれないだろう、どうするかということです。

少なくとも去年、今年、今年と言ってもすぐ12月ですけれども、それまでは手探りで、何ができるかということを考えてみようということで、坂東さんの発案で科学者京都 …。

坂東：科学者京都「会議」と違って「懇談会」。つまり有名科学者の集まりではないけど、「考える会」を作ってみようということでしたよね。

田中_正：という名前を、とにかくでっち上げました。明後日の日曜日に、その第3回をここでやる予定です。

これから「京都大学批判」をやるわけです。ちょっと時間はいいですか？

実は数えてみますと、お恥ずかしいことですが、私は定年まで京都大学に34年間おりました。1957年の暮れに京都大学に来て、佐藤文隆さんとか坂東さんが、確か2回生、3回生だったかな。

坂東：3回生だと思いますね。最初の講義は相対性理論でした。とても印象に残っています。

田中_正：立教大学からここへ来たのですけれども、だから僕はほとんど、京都大学に対して批判的な環境で育ってきた。学生時代、坂田昌一先生がいる名古屋大学、そこに6年間おりました。そこで亀淵さん、梅沢さん、高橋康さんと出会いました。湯川・坂田というと、一見、一体のように見えるけれども、一面互いに批判的でした。それから2年間、立教大学に拾われたわけです。本当は敬愛の裏返しなのですが、坂田さんとはひと味違って、意気軒昂、得意然と湯川批判を打つ武谷三男さん、温厚な豊田利幸さん、町田さんとか、その講師に迎えてもらって、首がつながった。そんな私が、なんで湯川研の講師に迎えてもらったのか、不思議なんです。その話も延々とあるのですが、…

坂東：まだ何も言ってませんよ。

田中_正：もの足りなかったら、まだ言います。で、私は34年間京都大学におりましたけど、あくまで、現在でもやっぱり外様です。京都大学に対しては一貫して、いつも批判的に見ております。

例えば今回の湯川・朝永100周年にしても、これを京都大学の同窓会のイベントにはしたくないわけです。湯川はやはり京都大学をこえ、日本を超えて、世界的なスケールの人だったとことを、今回改めて感じたわけです。

というのは、初めに申しましたように、お恥ずかしい次第ですが、私は湯川先生のそばに二十数年間、亡くなるまでおったわけですが、本当に湯川さんの偉さというのに気づかなかった。去年、一昨年ぐらいから、ラッセル・アインシュタイン宣言50周年ということで、この2年間、贖罪意識もあって、改めて湯川さんが残してくれた膨大な著作を読むことができました。とくにアインシュタインとの関係ですね。1945年、終戦直後から、48年にアインシュタインに再会するその前に、40歳前後の湯川さんが十篇ほどの論考を書いておられます。それを読んで本当に目から鱗が落ちたという感じでした。ラッセル・アインシュタイン宣言など、はるかに先取りしている。『湯川著作集』（岩波）で、それを是非読んでいただきたいと思います。

そんなこともあって、今回湯川研究会の会、自称科学者京都懇談会を作ることになりました。その場合、南部先生には、年に1、2回でも日本に戻られる機会に、何かご協力をいただけないか、実は先ほどお願いしたところです。

あとはよろしく。坂東さん。お願いします。

坂東 : ありがとうございます。

日置 : 田中先生、京大批判はどうなったんでしょうか。

坂東 : 結局、なんか京大ほめたはるみたいやないですか。

田中_正 : 日置君ともあろう人が、僕が非常に婉曲に言っているっていうことを、わからないのでは困る。

日置 : すみません。

坂東 : 今日の環境、経済、そういう話も、もう少し人類、ヒトという種の進化という中で考えるぐらいのスケールで捉えるのが本当の科学じゃないかというような話も、やってはったので、そんな話もしはると思ったんやけど、やはりませんでした。

私なんか、湯川先生の授業とか、『旅人』がちょうど出ていた時分だったんですけども、私はあの頃は、何を言うてはんねや、と思っていました。「世界連邦」、そんなのができると思っているのかなと思って、やっぱりちょっと、天上の人だなと思って、批判していて、ずっと反発していたんですけども、最近、田中先生と一緒に研究を始めて、やっぱり偉かったのかなって思うようになりました。私がこの頃、湯川先生のことを話をするとき、いつもみんなが「あんたちょと湯川先生の評価が変わったんか」って、よく言われるようになりました。

やっぱり科学という立場から、何をどう考えていくかという、そこが一番重要なのかなと思って、NHKのこの間のNHKスペシャルも、そういう意味では私も、勉強しているだけに、ちょっと不満でした。ここではだいぶ見られた方もあって、感激しておられた方も多いようで。田中先生のその言葉は、非常に大事なかなと……

坂東 : 川崎先生、何かちょっと、どうしても付け足したいですか？

川崎 : いまのと直接関係がないことなのですが、個人的な意見を言わせていただくと、湯川先生がああいうふうに、核兵器廃絶のために努力しておられたということは、私は尊敬しているのです。だけど、もし本当にそれをやるんだったら、私は例えば、科学者を辞めてすぐに代議士に立って、政治家になるべきだろうとおもいます。核兵器というのは開発されたとたんに、科学者の手を離れてしまうわけですね。われわれが何を言おうと、全然無力だとは言いませんけれども、影響力が非常に少ないのです。(付記：例えば次の本はその一つのケースについて詳細に書かれている。カイ・バード、マーティン・シャーウィーン著河辺俊彦訳「オッペッハイマー、「原爆の父」と呼ばれた男の栄光と悲劇」PHP研究所2007)

実は私のもう亡くなった義弟(故鎌田定夫)が、そっちの方の運動をやって、ある程度名前を知られているのですけれども、彼の活動自身は評価しています。だけど、本当にそこまでやるんだったら、やっぱり政治家になる所までいかなきゃいけないんだろうと、私は思うんです。それが一つです。

ついでにもう一つ言うと、去年も言ったと思うんだけど、今年は一応、湯川・朝永生誕100周年ということだけど、実はボルツマンが夏休みのときに、オーストリアのトリエステの西のドゥイノというところで、首をくくったのです。それは1906年の夏、8月だったか9月だったか忘れちゃったけれども、その100周年なのです。(付記：正確には1906年9月5日の夕方です。)それは祝うべきことだとは思いませんけれども、記念すべきことなのです。ボルツマンというのは、やっぱり統計力学の開拓者であって、何も無いところに作り上げた。

所で湯川先生が、ボルツマンを高く買っておられたということを、基研に初めてきた頃所員の方からお聴きしました、湯川先生も、ボルツマンと同じように、何も無いところから新しい分野をつくられてわけです。そういう意味で、ボルツマンが亡くなって100年経ってい

ることも、お考えいただきたいと思いました。

坂東 : どうもありがとうございます。

もうそろそろ若い方にお話を回した方がいいですね。では早川さん。

早川 : 何をしゃべればいいのかわかりませんが、ボルツマンが亡くなったのは9月の5日か6日かどちらかです。

私は何の因果か、基礎物理学研究所に就職いたしまして、物性なのです。だから時空、四次元を超えるというのは、当然、手を挙げなかったほうで、何を言っているのかと。

佐々木 : 古い。

早川 : 「古い」じゃなくて、世界認識と、認識できないものを議論して、どういう意味があるのかということですよ。

坂東 : 認識できないものみたいな言い方は、ちょっと違うと思います。

早川 : だからメタフィジックスかフィジックスかというので、もっと議論すべきことが、いっぱいあるのではないかと、僕は考えております。

佐々木 : お父さん、悲しんどるわ。

早川 : いやいや、そんなことはない。それはないと思うんですけど。人間スケールの物理というのは、やっぱり当然大事で、その開祖ということで、ボルツマンというのは、非常に大事であると思います。例えば経済物理などというのも、非常に大事かどうかというのは、これからわかってくると思います。ちょっと Yukawa Institute だからしょうがないところもあるんだけど、湯川・朝永に引きずられすぎている面も、やっぱり物性をやっていると、感じる次第であります。

そのへんも含めて、基礎物理学研究所として、どのように基礎物理というものを考えていくかというのは、意識せざるを得なくなってしまうということで、この研究会がどういう方向に行くかよくわからないですけど、物性をやっても、やっぱりちょっと外様かなという感じは、今年は意図的に増やしたのですけれども、それはちょっと感じます。

坂東 : やっぱりそうですか。

早川 : 例えば、蔵本さんとかは帰っちゃいました。懇親会に来ていないとか、そういう意味ですけど。

坂東 : あ、来られてないのは理由があるんです。蔵本さんは、ちゃんと挨拶をして帰られて、奥さまが風邪を引いて、ご飯をつくらんならんで失礼しますということでした。

池田 : 私が言いたいことは、湯川先生というのは、基礎物理研究所のみに閉じて考えるべきではないということです。原子核物理をやるようになって、ここへ来たときに聞いた湯川先生の肉声を何度か思い出します。私が、東大から新潟大学行くことになったときです。研究会にきたときです。湯川先生が私に「池田くん、ちょっとちょっと」と言って来られ、部屋に呼んでいただきました。「きみ、新潟大学に行くことになったんだね」そして「ぼくも昔、ある地方の大学に行くことを要請されて」と言われるのです。それは、わたしの理解では、金沢大学とか名古屋大学とかが帝国大学になることを申請するときの、招請合戦であったのです。今では良くわかりますが、金沢大学が古くから帝国大学になることを想定して運動していたのです。それで湯川先生に是非来て欲しいとはなしがあったのではないのでしょうか。

それで湯川先生は「ぼくは、そういうところへ行ったら、研究できないと思って断った。良く行く気になったね」と、おっしゃったのです。若輩のわたしを親身になって心配され、びっくりしました。

そのとき私は答えたのです。「湯川先生や朝永先生に作っていただいた、基礎物理学研究所と原子核研究所がありますから、ここで共同利用研究ができる保証がありますので、行くこ

とにしたのです。頑張りますので宜しくお願いいたします」と言いました。

それからもう一つ、いろいろなことが思い浮かぶのですが、非常に広い見識を持っておられた。今日お話を聴いたこと、ノーベル賞受賞当時、いろいろの歴史を読んで見て、また周りの状況を見ても、日本を代表していただいたような、初めて、国際的な、最高の、自分達がやれないことをやっていたいただいたチャンピオンであることを周りの人みなが認めたのだと思います。湯川先生は、それに学者としても、通常の枠を超えて応えようとされたと思っています。それは、中間子論以後の話です。その点はやはり、先ほど佐藤_xさんがおっしゃったことでもあります。これはセグレの書いたものには、日本というのは湯川先生を、すぐ社会的な英雄にしてしまっていて、科学者として遇していないと批判的に書いていますけれども、湯川先生はやっぱり、国のなかでは、自分が研究者として成してきたことにたいして、科学者・人間として、どうしなければならないかをずっと考えておられたと思います。

戦後、朝永先生はじめ、湯川先生も含めて、日本の実験を、何とか世界の一流にしなきゃいけないことも、一つの命題としてあったのだと思います。これも、お書きになったものを読んでみますと、全部書いてあるわけです。私が素粒子理論物理を選んだ理由はということかということで、坂田先生も書いておられます。それは、誰もやっていない、そういうところでのみ、当時、世界の第一線の研究が可能であって、ここに賭けてみたのだということで、スタートした。戦後、状況が変わったのでしょう。そういうことが、やはり、私は、湯川先生達の基本的な遺志を継ぐ、日本の科学であり、科学を担うみなさんの今後を願う気持ちを、全体として持っておられたというのが、私の理解であります。そういう視点で、ちょっと一言ご挨拶を申しあげました。

坂東：亀淵先生は、確か物理学会[2006年3月愛媛大学での大会]のときは、かなりいろいろと言っておられたのに、昨日はだいぶ控えていっておられたのかなという。何か言い足りないことはありますか。

亀淵：言いました。

坂東：それじゃあ、基研の話も出たので、九後さん、何か話しますか。

九後：僕は基研の所長になって、いつも思うのは、やはり湯川・朝永が、基研にとって一番偉かったのは、基研をこういう全国共同利用研にしたことです。それがいまだに、その基礎が非常にしっかりしていたので、いまだにこの基研が、京都大学の附置研究所ということではなくて、やはり日本の基礎物理学を担う、非常に特殊な研究所ですね、「特殊な」というのは、みなさんが特殊な感情を抱いていただける研究所になっているということです。それを何度も、所長になって思いました。それが一つです。

もう一つは、所長の立場を離れまして、先ほどから出ています、京都科学者懇談会というものに、出してもらっているのですが、坂東さんも田中先生も、いつも湯川先生が非常に偉いというふうに、認識し直したということを毎回おっしゃるのです。本当にそんなに偉かったのだろうかと思うのですが、先ほどの共同利用研の話から離れて、湯川先生の何が偉かったのかと考えてみますと、昨日、亀淵先生がちらっとおっしゃった、いやかなりおっしゃったのですが、結局、湯川先生は、最後まで物理学を諦めなかったと。格好が悪いとか、ほとんど失敗作だったとか、みなさん思っておられるかもしれません。しかし、ずっと自分で物理学をやっておられたことは、確かに、朝永先生の潔さはなく、一面格好悪いのだけれども、それを、亀淵先生は昨日、「格好いい、見事だ」とおっしゃったと思うのです。僕もその通りだと思うのです。

湯川博士の『NHK スペシャル』では、焦点を核廃絶ということに絞って番組をやったのですけれども、僕はあの番組を見たときに、北朝鮮が核実験をやったというこの社会情勢の

もとで、一部の政治家が、日本が核兵器を持つことを考え直すべきだとかおおっぴらに言うという風潮のなかで、NHKがああいう番組を放送したというのは、それはそれでNHKとしては非常によくやったと思いました。しかし、あの番組の内容自体は、非常に一面的、湯川先生なぜああいう運動をしたのかというあたりが確かに、田中先生がおっしゃったように描けていないし、何かものすごく皮相的、表面的な感じもしました。それに、湯川先生がそういうことをやったというだけでは、先生を本当に尊敬するということにはなりません。やはりそういう側面と同時に、最後まで湯川先生が物理をやるということに執着されていた、そっちの面も併せて考えないと、やはり湯川先生の偉いところはわからないのではないかと思います。

朝永先生は、1949年にプリンストンで朝永・ラッティンジャー液体の理論をつくって、すばっと辞められて、それはそれで格好いいんだけど、僕はあまりそっちのほうは見習いたくなくて、湯川さんのほうを見習いたいと思っております。

坂東：どうなんですかね。何しろ学問スタイルも朝永先生は格好いい、でも湯川先生は悪いというような話ではないのではないですか？ 本当は亀淵先生は、やっぱり格好いいほうがいいのかと思っておられるんじゃないですか？ どっちを評価するかというと、格好いいほうなんじゃないでしょうか。

亀淵：つて言われましたらちょっと。

私は、朝永は格好良く振舞った、失敗することはなかった、格好良く生きる、湯川型はいろいろと悲劇的なこともあり得るということを、ちょっと言ったわけで、一般に人間は、どういうふうに生きるかという二つのタイプに分かれて、湯川型と朝永型、そういう意味で二つになっているんじゃないかと思うんですが、私は湯川型は美しく見えると。美しいところがある。朝永型は、さっと轉身するという意味で、潔さがあつたというふうに言えるのでしょうけど、人間は一般にそのどっちかになる。

私自身は、湯川型に憧れておりました、というわけです。

坂東：へえ、それはそれは。きっと朝永型かなと思っておりましたけど、それは人それぞれの生き方がありますので。

南部先生、いかが。

南部：そう言われても、ちょっとだけだけどね。困りますね。

私も今回のために、だいぶ朝永から借りたものを片っ端から、手元にあるのを5、6冊読んでいたんですけど、あとですぐに忘れてしまうんだけど、一応コンピュータに入れていますけど。

いまの亀淵さんの話で、これはだから、何の意味はないんですけども、渡辺隼さんが、やっぱりそういう characterization ですか、なんかやっておられまして、覚えているのです。それから高林さんの、朝永型と湯川型って、どちらというわけではないんですけども。

一つ覚えているのは、渡辺さんが書いたもので、いわゆるフロイド的な心理分析ですか、こんなことがあつて、例えば湯川にエディプス・コンプレックスがあつたと。どう思いますかね。

[わかる]

そうかもしれないですか。僕は本気でわからなかったんだけどね。

それから、もう一つ白状しますけれども、私に関することだけど、1982年でしたっけ、内山さんの学会がありまして、何だったっけな、帝塚山で。

佐々木：g & G.

南部：あのとき、内山さんがね、私を学会のあとで、車で案内しますって、それであそこの遺跡と

か、案内してくれたのです。そのときの自動車の中の話で、私について、あれは何て言うんでしたっけ。なんとか芸者っていうんですか、つまり若くなくて年を取ってしまった芸者が、若い人の真似をして。

坂東 : 何て言うんですか。誰か知っている方がいたら。

佐藤_x : 「年増」では？

南部 : 「年増芸者」か。よく知っていますね。

坂東 : 佐藤さん、何でも知ってますね。

佐藤_x : いやいや、知らない。

南部 : それみたいだと、私を評価するのです。それは非常に気に入らなかったんだけど。

それからあとになって、また内山さんに会ったときに、「この間、失礼なことを言いまして」と謝られました。

坂東 : 内山先生が。へえ。

南部 : 僕は何も言わなかったですよ。私もそれで何も返答しなかったんだけど。それだけご報告しておきます。それが湯川型か朝永型で、ちょっと関係があると思いますからね。

坂東 : なるほどね。ありがとうございます。どうもどうも。

実験家の方はいらっしゃいます？

中野 : いきなりですか。白ワインが喉に効くということがわかりました。

この研究会に出て思ったのは、トークを終わったあとに、南部先生から「面白いでしょう、理論は」と。本当にそう思いました。

僕は実は京都大学大学院を受けるときに、素粒子論が第一志望で、見事に落とされたのですが、その前の課題研究が、くじ引きというのがありまして、そのくじ引きも落ちて、全然、その世界に触れることなく、憧れだけを持っていたのですけれども、この研究会に出てみて、やっぱりそういう憧れというのが、まだあるなということがわかりました。職業は実験物理屋なのですが、アマチュアで理論屋を目指しているという感じです。

それともう一つ、いま、pentaquark の状況はこういう状況で、ときどき苦しいこともあるのですが、この研究会に出て思ったのは、あまり苦しくなくなった。もっと、理論屋の方は、自分はちゃんと説明はできないけど、俺は世界の本質を知っているというような自信に満ちた方がいっぱいいらっしゃって、僕から見ると、あんまり裏付けのない自信のような気がするのですが、そういうのはたいへん勇気付けられます。ありがとうございます。

坂東 : どうもありがとうございます。変なことで勇気付けられるようでございます。

Quark も、まだまだいろいろと、バラエティがあり、階層的な構造があるんじゃないかと、私なんかはすごく、心密かに期待しておりますので、よろしくお願いします。

石原 : 私は先ほどの広島理論研出身なのですが、佐藤文隆さんに拾っていただいて、京都大学に就職いたしました。京都大学の洗礼を受けました。

京都にいたときに、物理としてどういうことをやるべきかという議論が、盛んになされていました。特に物理第2教室では、毎年教室発表会があって、そこで非常に辛辣な相互批判があって、いま、何をやるのか、おまえがやっていることは面白いのか、本質的なのか、こういうことが厳しく批判されて、物理というのはすごく厳しいものだということを感じました。

しかしそれまで育ってきた、私が育ってきた理論研は、むしろ興味の動くままにというか、ほのぼのとやってきたところなのです。佐藤文隆さんが、どう考えておられるのか、ちょっとお聴きしたいのですが、もちろん、いま何をやるべきかということに基づく物理というのは、とても重要なことだと思うのですが、みんながみんな、そればかりとい

うのが、物理なのかどうか。もうちょっと物理は幅広くて、… ぐらいの揺らぎを包含できるキャパシティが、理論研のようなところも、その存在が許されるようなものでありたい。そういうことで、今後もあるってほしいなと思います。

佐藤_x：少し政策マター的な話です。私は学術会議をやっていたとき、大型科学委員会という、全分野の委員長をさせられて、考えた問題です。

この共同利用研というのを実現したのは湯川・朝永です。アイデアもやっぱり湯川・朝永ですね。きっと戦後の民主主義というか、若手がわあわあと自由に言っていたエネルギーが実現したのでしょうかけれども、中身はやっぱり、湯川・朝永が、理研だとかプリンストンだとか、Bohr とかのあれですね、いろいろなバリアを突破したというのは、あの頃の若手のエネルギーだと思うけれども、共同利用研体制というのは、ほかの分野にもものすごく広がったわけです。戦後日本のある時期の制度をつくったのだと、文部省の黄金時代をつくったわけです。

だいたい長い間、事務次官というのは、昔は日教組と闘っていた初等中等局長が事務次官になっていたのですが、1970 年代後半から、国際学術局の局長をやったのが事務次官になるというふうに、文部省自体がそこでがらっと変わっていった。それはほとんど、物理の朝永とか久保とか、物理学が先導して、日本の学術体制、研究の制度をつくっていった。そういうものが、ざっと横に広がった。ほかの分野になると、だいたい物理学のスピリッツというのは、なくなっているみたいな面もあるんだけど、いずれにしろ、物理が組織づくりの意味で、ものすごくオリジナリティを発揮して、現実のものにしたというのは、日本の学術史上に残るものです。実際、文部省の役人の出世のコースまで変えたぐらいに効果があったわけです。

京大の物理第 2 教室というのは、僕が大学院に入って、助手になるあたり、研究計画委員会というのができた。研究は計画できるものであるという。だからけんけん譚々やって意味があるとかないとかいうのを、集団討論で云々かんぬんと議論した。日本のこの時期の物理なり、ほかの分野で、そういうものはまったく議論がなかったような頃には、本当に革新的だったわけです。研究を広い委員会とかで議論するとかは。

だから京大とか名古屋の出身とかいうのは、地方の大学に行くと、みんな学部長とかになるよね、あれは委員会で訓練されているからですよ。昔の民主的な物理教室を出た人はそういう能力がついた。

さっきの話に戻ると、研究体制常置委員会とかの分科会の委員長をさせられて、長いレポートを書く段になっていろいろと考えただけけれども、いまみたいな話ですね、研究って本当に計画できるものだけかなということが、僕にはちょっと疑問になった。

それはもちろん、戦後で貧しいから、一極集中的にどこかピークをつくる、特に実験なんというのはそれで、いまだってそういう面があると思うのですが、ただ、最近、共同利用研体制というのは、ほかの分野においても、やや陰っているわけです。ですからオールジャパンで、一つの計画にみんなが参加するという形が何時までもいいのかということです。物理が先導して他の分野にも広げたんですから、あの共同利用研体制というのを、いっぺん、反省、総括してみる必要があるのではないかなと思う。

まず規模が何十倍変わっています。30 倍とか 40 倍とか、規模が変わったときに、共同利用研体制に巻き込むときのプロポーションというのは、全部でなくても、オールジャパンでなくてもいいんじゃないか。基研は共同利用研をつくった、これは大成果だったけど一時代回っています。本当は物理学者というのは、制度をつくったりでも本当に革新的なことをやってきたのです。物理帝国というのは、その中身だけじゃなくて、日本の制度をつくって

きた、基研、湯川・朝永というのは、そのリーダーであったわけです。

一度、研究は計画できるものであるという観念を見直してみる必要がある。全部がそうかなと。政府のプロジェクトとかは、お金をたくさん使うから、計画的にやる。だけどファンダメンタルな問題とかというのは、もっと自由であり、全部を巻き込むのがいいのかどうか。みんなが巻き込まれているわけではないというのは事実なんだけれども、ただ共同利用研体制をつくったというだけで終わっていていいのかなという気がします。僕は現在から、そこでも本当は物理学者は先進性を示さなきゃいかんのではないかと思います。

だから共同利用研体制というものの見直しを、いろいろと書いたことがあるんだけど、あんまり誰も思わないですね。それでまた 100 年、湯川・朝永となると、それが一つの成果として、あの時代は成果ですよ、日本のいろいろな分野の学術のコミュニティを変えたんだから。だけど、一時代回ったんだということも、僕は反省してみる必要があると思います。

佐々木：どうもありがとうございます。

反省はしないとイケない。だから反省しつつ、この研究所を今後どのようにして行こうかということで、いま九後所長のもと、いろいろと、いろんなことを考えて、いろいろとトライをしているわけです。佐藤さんも、ぜひともそういうことにもご協力をお願いします。いろいろと。

やっぱり言うだけじゃいけませんよね。

佐藤_x：いや、言うだけや。たっぷりやってきたもん、僕は、本当に。

佐々木：これは物理でも同じだと思うんですが、やればやるほど、やる仕事は増えるので、たっぷりやってきた人ほど、たっぷりと、まだまだやっていただかないとイケない。しょうがないですよ。よろしくお願いします。

そろそろでもないのですけれども、若い人、と思ったら、このへんにちょっと、一人。逃げるな。こういう面々では言いづらいのかもしれないですけど、目隠しをしたつもりで、いくらでも。例えば南部先生の批判をするとか、そのぐらいの気概で一言。

日置：中西先生はお帰りになったから。

橋本：ちょっとそれは残念なんですけれども、率直な感想を言わせてもらいたいんですけれども、この「学問の系譜」研究会の、名前を、僕はあまりぴんとこなかったのです。藤井先生、聴いてください。若いものの立場として、ここにおられる方々、例えば名誉教授の方々とか、普段、まったくお目にかかれない方、そういう方々が実際に、生き生きと、その当時の、物理が発見された経緯とか、ライジングとフォールという話もありましたけれども、そういう経緯の話、それと湯川・朝永の話を、生き生きと語ってくださるというのは、僕にとって、教科書で学んだところと、いま自分が研究しているところの、間の系譜を埋めるという意味で、非常に、本当に有意義でした。

この間の、湯川の NHK のテレビがありましたけれども、あれを見て、僕が率直に思ったのは、あのテレビの構成がどうかということよりも、湯川先生が実際に動いて、しゃべっているということが、非常に衝撃だったのです。僕はそういう世代で、この間、KEK の一般公開に行ったときも、朝永先生が実際に動いて話しているというのが、ビデオで流されていました。それは僕にとって、非常に大きなことでした。

こういうことが僕にとって、いままでなかったというのは、多分、考えてみますと、こういう研究会がそもそもなかったということと、学会に行きましても、いろいろな方が、いろいろな招待講義をされても、僕は弦理論のセッションのなかに留まってしまっていて、大抵の方がそうだと思うのです。そのなかでのみの話を聴いて、それで帰っていく。他分野の人の話を聴く機会すらないのです。それは非常に問題だと思います。こういう機会が、若い人

に向けて、今回、インターネットで配信されていますけど、そういうものがあるというのは大事だと思います。

藤井先生と今日、お話していましたが、コメントをいただきまして、例えば弦理論の研究会に行ったら、100GeVとか、エレクトロンボルトという数字すら出てこないわけです。その数字すら出てこない話ばかりやっていると。それはどういうことなんだと。それは僕も、非常に残念なことだと思います。

例えば僕は、学部生のときに、中西先生の本を買いました。もう帰られたということで、ちょっと残念なのですが、それを言おうと思ってはいたんですけど、そこでスケール不感症という話と、スーパースtring症候群という話が載っていました。僕は非常にそれに影響を受けまして、M2に上がるまでは、弦理論なんかやらないほうがいいと思っていたのです。

それが、何の因果かいろいろとあって、Dブレーンに魅せられて、Dブレーンをやることになったんですけども、いま、非常にうれしいと思っていることは、実際に弦理論の研究会に行きましても、「GeV」という言葉が最近、出てきています。それは僕の話にもあったように、QCDをうまくつくるような、テクノロジーとしての弦理論が発展してきて、それは実際に、僕もいま研究していますけれども、自分の次の論文に、いままでいろいろな論文を書いてきて、初めて pion mass が出てくるとか、非常に僕は誇りに思うのです。弦理論をやってきて。

そういう人たちが、もうちょっと若い人にも、こういう機会がもうちょっと広まって、分野間の交流のこととか、昔のことがわかるような機会が増えればと思います。

坂東：変な話ですけど、Nambu-Goldstone Boson という話がだいぶ出ていましたけど、中西先生はいまだに pion は、Nambu-Goldstone Boson ではないと確信しておられるんですって。なんでかという、mass があるじゃないかというので、あれぐらい頑固な先生ですからね。

でも、私は今日、思ったのは、経済とか環境とか、そういう話をした方と、素粒子の人、昨日の蔵本さんもそうだと思うんですけども、人にわかるように話をしない。私が、蔵本先生に、あなたの話はよくわからなかったと言ったら、「そんなこと言うけど、弦理論はさっぱりわからなかったわ」と言われました。

やっぱり、他領域の人と話をするのは大切ですね。実験の人なんか、いつもお金を取りに行かんらんから、どうしてもやさしい言葉で話すのに慣れているけど、どうもこういう感じのところの分野は、コアの部分は、もうちょっと人に分かるように話して欲しいという気がしますけどね。いい勉強になったんじゃないかと思います。偉そうなことを言ってますません。

佐々木：どちらに振りましょうか。そんなに若くないけど、そうだな。ちょっとそこらへんにやぐざな、僕の後輩がいますから。何か一言話してください。

伊沢：先輩の佐々木先生からのご指名なので。最近物理からかなり離れていて、教育側からも知れませんが、ちょこっと。

私の場合、湯川・朝永両先生とのお付き合いといえば、朝永先生は大学1年生に入った、30年前に、小谷正雄先生とだったかな、2回に分かれて集中講義に来られまして、お話をうかがいました。

朝永先生が亡くなったのが、ちょうど4年生の夏休みで、9月の最初の授業に、田中正先生の素粒子物理だったかな、で、入試の前だから、学生が少ないのでやめようかなんていう話の後で、朝永先生の想い出話をされたのを、いまでもよく覚えております。

湯川先生は、私は直接お会いしたことが一回もないのですが、ちょうど私の先生の林忠四

郎先生の親分ですから、田中先生の前任者だと思うんですけど、ドクターの1年のときかな、亡くなられて、ちょうど香典を出したのが、唯一の僕の、湯川先生との縁でございます。

普段、どうしても教育側をやっていますけれども、かなり研究のほうからは離れておりますけど、こういう機会にまとめていろいろな話を聴けるのは、非常にありがたい機会ですし、私もかなり若い頃から、そういう historical なことに興味を持って、いろいろな、林研の昔のこととか、興味を持っていろいろと調べたこともございまして、非常にありがたくて、できればもう少し、いろいろな方がおっしゃっておられたように、もう少し若い方が出て、こういう貴重な機会だからと思いますので、もう少ししました。

それとまた、できれば来年、私は出られるかわかりませんが、またこういう機会があることを、非常に強く期待したいと思います。坂東先生、よろしくお願いいたします。

それともう一つ、もう少し若い方も出られるような、コマーシャルが何かを、積極的にされていただければと思います。簡単でございますけど、先輩のご指名でございましたので。

佐々木：どうもどうもありがとうございます。

いま、伊沢くんが言ったのは本当にそのとおりで、もったいないんですね、実に。一応、インターネットで流れているとはいえ、これだけの方に集まってもらって、これだけの話をさせていただいているのに、若い人がほとんどいない。それは実は、われわれの責任なんだろうと思うんですね。若い連中がそんなのを聴いたって、役に立たんと、要するに飯の種にならんと思っているのですね。

確かに、非常に短期的にはそうなんでしょうけれども、そういう話を聴くことが、実は自分の飯の種になるんだということを、例えば佐藤さん、あれ。帰っちゃった。

坂東：佐藤さんね、明日の朝、早いから帰らはった。

佐々木：どうやって、若い連中に納得させたらいいのかなと。

いろいろと、今日うかがったこととか、いろいろな方が言われたこと、ここでも言われたことは、全部それぞれ、すべて、まったくそのとおりなのですが、ただ、われわれはそれを、やっぱり次の年代に伝える役割があるのですが、どうやって伝えるかということに関しては、どなたも言わない。何にもおっしゃらなかったのですね、今日。

それがちょっと、残念というか、実はそこが一番難しいので、誰も自信を持って言えないことなんだろうと思うんですけども、なんとか、いかにして次の世代に伝えるか、伝えたいことはたくさんある。わかっているんです。伝えたい内容もわかっているんだけど、どうやって伝えたらいいのかということを、どうやってやったらいいんでしょうね。知恵を絞ってください。物理学会長がやっぱり責任がある、というぐらいで。

どうでしょうか。そろそろお時間のほうは。ごめんなさい。いろいろとまだ、発言されていない方、あるいは一旦発言したけど、まだ言い足りなかった。川崎先生なんか、そういう顔をちょっとされていますけど。いいですか。山田さんとかはどうですか。どなたか。そこも多少、若いっていったら若いな。

林先生の不肖の弟子の不肖の弟子ですね。孫弟子ぐらいになる。真貝くんといいますが。

坂東：不肖の弟子って佐々木さんのこと？

佐々木：僕らの年代の連中は、みんな不肖の弟子です。前田恵一の弟子です。

真貝：突然振られてしまいましたけれども。

私もひやかしのつもりで、この研究会に登録したら、若い人がいないのでというので、明日の座長まで頼まれてしましまして、恐縮しております。

私は十何年も前に、基研のこのアトム型研究員で、1カ月、2カ月滞在したことから、京都大学と縁を持てまして、非常にうれしく思っています。僕はポスドクが11年ぐらい続い

て、やっと今年、就職できたのですけれども、その間も基研にアカウントを持っていたおかげで、研究活動が細々と続けられまして、非常に感謝しております。

今回、この研究会で、みなさん、本当に教科書の著者としてしか名前を存じ上げなかった先生方が、直接、生き生きと話されているということに、私は非常にうれしく思います。私自身も、先生方のように、一言一言の重みがあるような発言ができるように、かつ、はきはきとものが言えるような大人になりたいなと思っています。ありがとうございました。

佐々木：どうもありがとうございました。

あつ、藤井さん。1時間は話してもかまいません。

藤井：僕は湯川先生や朝永先生は、実はあまりよく知らない世代なのです。ただ、接点があるとなれば、1954年に、初めて若者の夏の学校というのをやったのです。それは亀淵先生や大貫先生に手伝ってもらったようなところもありますが、結局、湯川先生を紹介していただいて、信州の木崎湖というところで夏の学校、信濃教育会という場所を借りていただいた。そしてなぜか僕がいろいろと世話をして、最初の校長先生になって、行ったのです。大町の教育委員会でした。大町の教育委員会の要求は、湯川先生に来ていただいて、講演していただく。それも湯川先生にお願いしたら、「いいですよ」ということ。

で、僕らはあそこに集まって、楽しくやっていたら、突然、電話が何かあって、湯川先生がどうしても行けないのです。その代わりに、朝永先生を推薦する。朝永先生は、まだノーベル賞をもらっていらっしやらなかった。それで次の日に見たら、湖水周辺の道路に、大町の選挙カーみたいなあれが走るわけです。町の講演会です。で、「湯川先生の代理で、朝永先生が明日おいでになります。みなさん」という宣伝が回りました。みんなそれを聴いて、えへへと笑っていました。

朝永先生がおいでになって、落語をおやりになりました。その前にも、「若者をどうしたらいいか」って、僕はちょっと、suggestionでもあるんです。朝永先生は、みんながなにか、雑談みたいなものをしていました。そのときに、いま、阪大にいて、もうお辞めになったのかな、長嶋さんが立ち上がって、「こんな素粒子の勉強ばかりやっていて、お嫁さんが来るのかな」と言ったら、朝永先生が「大丈夫だよ」と言ったんです。そして大丈夫になったんですね。ご存じでしょう。知らない？ 長嶋さんの奥さんは、朝永先生が世話したという解釈もあります。そういう信頼もあったのです。

別の日には、朝永先生お得意の、落語を披露なさった。これはあんまり、大きな声で言えないんですが、朝永先生がしゃべったことだから、まあいいだろうな。落語みたいなもので、あの当時、やっと角砂糖というきれいなものが出回るようになったのです。それで、設定はもう、全然忘れちゃったんだけど、朝永先生のお話では、男の子たちが集まって、紅茶か何かを飲んでいたので。その世話した奥さんが、気に入らないと言うのです。みんな、トイレに行くんですけど、帰ってきてそのまま、角砂糖をつまんで、紅茶に入れるっていうわけだね。奥さまが文句をおっしゃった。ということ、多分、世話人がいて、それは学生の人で、恐縮して、なんかしのばせた。

しばらくして、ここで会食していた連中がトイレに行ったんです。そうしたら、なんと、トイレの前に、挟むものが置いてあったんです。これでおしまいです。

若者を集めるんだったら、昔だったらこうだからね。いまだったら、別のことをお考えになって。

坂東：だいぶ時間が経ってしまいました。そろそろおひらきですね。どうもありがとうございました。今日、実は、昨日から学術情報メディアセンタという、京大のなかにセンターがあるのですけれども、そこの方々に、今年は写真を撮っていただいております。実はこれは、プロ

ジェクトといいますが、有価資料をもうちょつきちんと、系譜も含めてやろうということで、九後さんと、学術情報メディアセンター長の美濃先生とで、プロジェクトを組んでいただきました。そのおかげで、今年はプロに撮っていただいて、青木さんがその後ろで指導しているというかたちになっておりますけれども、ずっとご飯も食べないで、どうもありがとうございました。

言い足りないこともあると思いますが、また明日、早く来てでも、話していただければと思います。本当に今日は長い間、ありがとうございました。



ph10 中西/日置/佐藤文，坂東//石原，南部/川崎/池田//田中正/坂東//田中正，坂東，橋本/九後/坂東，小林